

吉田城址が豊橋市指定史跡になりました

吉田城址は、豊橋公園やその周辺に今も遺構が残されています。このたび、遺構を後世に守り伝えていくため、令和4年3月30日に城址を市指定史跡に指定しましたのでご報告します。

◆所在地・面積 豊橋市今橋町3-1ほか

※本丸・二の丸・三の丸跡（豊橋公園内）	71,316.03 m ²
水門跡（豊城中学校敷地・豊川河川敷内）	272.50 m ²
総堀土塁（名古屋刑務所豊橋刑務支所敷地内）	1782.39 m ²
合計	<u>73370.92 m²</u>

◆史跡指定の経緯

史跡とは、貝塚や古墳、集落跡などの遺跡で、歴史上または学術上価値が高いものをいい、その所在地を文化財として指定します。吉田城址では、近年の発掘調査を含む調査研究の進展により、残存する遺構の価値が把握され、高い評価を得ています。こうした現状を踏まえて史跡指定を行うこととなりました。

なお、吉田城址全体は84万m²にもおよぶ巨大な遺跡ですが、多くは住宅地や公共用地になっています。今回の指定は、遺構の性格上重要であり、かつ遺構が目視できる、残存状態がよい部分を対象にしています。

ポイント① 市街地に残る、石垣・堀・土塁

吉田城址は、市街地にあるにも関わらず、石垣や堀、土塁など遺構が良好に残されていることが特徴です。とくに石垣は、安土桃山時代の池田輝政による大掛かりな野面積み石垣や、豊川からの眺望を重視したみごとな総石垣づくりなど、吉田城址を価値づける最も重要な遺構です。

ポイント② 史跡指定をきっかけに、吉田城址を深く知り、活かす！

令和4年度は、以下の事業を行います。

- ・吉田城址を保存し活用していくための指針づくりとして、「吉田城址保存活用計画」を策定
- ・城址の文化財的な価値をより分かりやすく知っていただくため、シンポジウムを開催（7/16[土]午後、豊橋市公会堂）
- ・公式ガイドブックの配布など



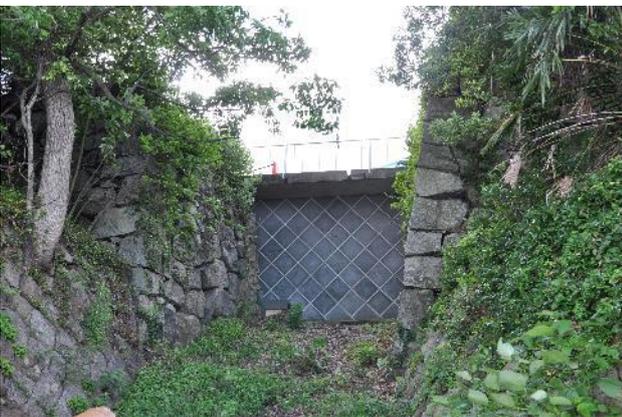
市史跡指定範囲（全体）



吉田城址の主要部（本丸・二の丸・三の丸跡）



復興鉄橋と石垣



水門跡



総堀土塁

豊橋市指定文化財指定理由書

指定名称 吉田城址 よしだじょうし
指定区分 史跡
員 数 73370.92㎡
時 期 戦国時代～江戸時代
所 有 者 財務省、国土交通省、法務省、豊橋市
所 在 地 豊橋市今橋町3-1ほか
指定理由

吉田城は、近世の文献によれば永正2年（1505）に牧野古白^{まきのこはく}が築いた今橋城を始まりとするが、実際には明応年間（1492～1501）には牧野氏が今橋を実質的に支配しており、このころすでに今橋城は存在したと考えられる。今橋は、堯孝^{ぎょうこう}の『覧富士記』（15世紀前半）に現れるように、築城前から街道の宿であり、都市的な場として栄えたところであった。その後、牧野氏と渥美半島の田原を拠点とする戸田氏とが争奪戦を繰り返す。駿河・遠江の戦国大名である今川氏の支配を受け、この間に今橋城は吉田城と名前を変えている。さらに西三河の松平家康が東三河を制圧すると、重臣の酒井忠次を城主に置き、徳川家康の関東移封後は、池田輝政（在城中は照政）が石高15万2千石の城主となり、吉田城を石垣や大規模な土塁、堀を備えた近世城郭として整備した。そして江戸時代には竹谷松平氏、深溝松平氏、水野氏、小笠原氏、久世氏、牧野氏、本庄松平氏、大河内松平氏などの譜代大名が、石高3万石から8万石で城主を務めた。

現存する遺構は近世吉田城のものであり、基本的な構造は池田輝政による整備の姿と考えられる。ただし、深溝松平氏による本丸御殿の建設と本丸の再整備、小笠原氏の総堀への通水など、近世にたびたび改修や整備が進められた。また、発掘調査からは戦国時代の遺構が確認され、戦国時代を通じて城域の拡大や整備が進められてきたこと、今橋城や酒井忠次時代の吉田城は想定以上に規模が大きかったことなどが明らかになった。

近世吉田城の構造は、本丸を中心に二の丸と三の丸が取り囲み、さらにその周囲に藩士の屋敷地である武家屋敷地を設け、最も外側を総堀で囲むものである。比較的単純な縄張りと言えるが、近世の城絵図から、内部は建物や塀により複数の枡形^{ますがた}や通路の折れを設けるなど、防御の強化を意識した複雑な構造をとっていたことが判明している。また城域は東西1400m、南北700m、総面積は約84万㎡にも及ぶ壮大な規模の城であった。

吉田城址の遺構は、おもに豊橋公園の西側一帯に良好に残っている。発掘調査や全国的な視点にもとづく再評価により、遺跡の持つ本質的な価値が明らかにされつつある。

本丸は豊川に面した北側一帯を総石垣にしており、急斜面を保護するとともに、豊川や西に位置する吉田大橋からの視覚的な効果が図られている。とくに、北西角の鉄櫓台石垣^{くろがねやぐら}は、地元で産出されるチャートや石灰岩を用いた野面積みで、池田輝政が城主の時に築いた、当時としては全国屈指の12.7mの高さを持つ高石垣であった。また、本丸南多門周辺にも石垣を重厚に築いており、時期はわずかに下るが鉄櫓台に匹敵する高石垣が築かれている。このほか、本丸南・北多門の石垣は、深溝松平氏の本丸整備に際して名古屋城石切丁場から石材の花崗岩を調達しており、名古屋城石垣と共通する刻印が認められることなど、特筆される点が多い。

石垣以外に残存する遺構として堀や土塁がある。本丸の堀は幅18～20m、深さ約10mの

大規模なもので、二の丸や三の丸の堀も一部残存する。また市街地にあるにもかかわらず、二の丸や三の丸の土塁が良好に残っており、近世城郭の中では全国的に見ても稀有なものといえる。

このほか、豊橋公園の西にあたる豊川河畔には吉田城と豊川との深い結びつきを示す近世の水門跡が現存する。水門は、豊川から城内へ物資を直接搬入するため、川に面して設けられたものであり、上に米蔵が設けられた埋門で、両袖の石垣が現存している。また、城域の東端には近世の総堀の土塁が120mほど残されており、後世の削平を最も受けやすい遺構であるにもかかわらず現存している。以上の遺構は、全国的に見ても類例や残存例が少なく、貴重である。

さらに吉田城址は、近代に歩兵第十八聯隊^{れんたい}など陸軍の用地に利用された。現在も営門跡^{しょうしや}や警戒哨舎、軍人記念碑の神武天皇像など、軍隊時代の遺構が散見され、軍都として栄えた往時をうかがうことができる。近代に吉田城址が陸軍用地となったことで、遺構が再利用され現存するきっかけとなった事実は、吉田城址の保存のうえで無視できない。

吉田城は、戦国時代から近世を通じて東三河地方における政治・経済・軍事の拠点であり続けた。また吉田城が設けられたこの地は、物流の大動脈であった豊川と中・近世の東海道が交差する交通の要所であり、吉田湊を有する湊町でもあった。吉田城址は、長期間にわたって東三河地方の中心的な役割を担い続けた、本市の歴史を象徴する重要遺跡であり、現存する遺構は価値が高い。そのため、遺構が良好に残る範囲を対象に、市の文化財に指定して長く保存すべきものである。



吉田城址 主要部



復興鉄櫓と石垣



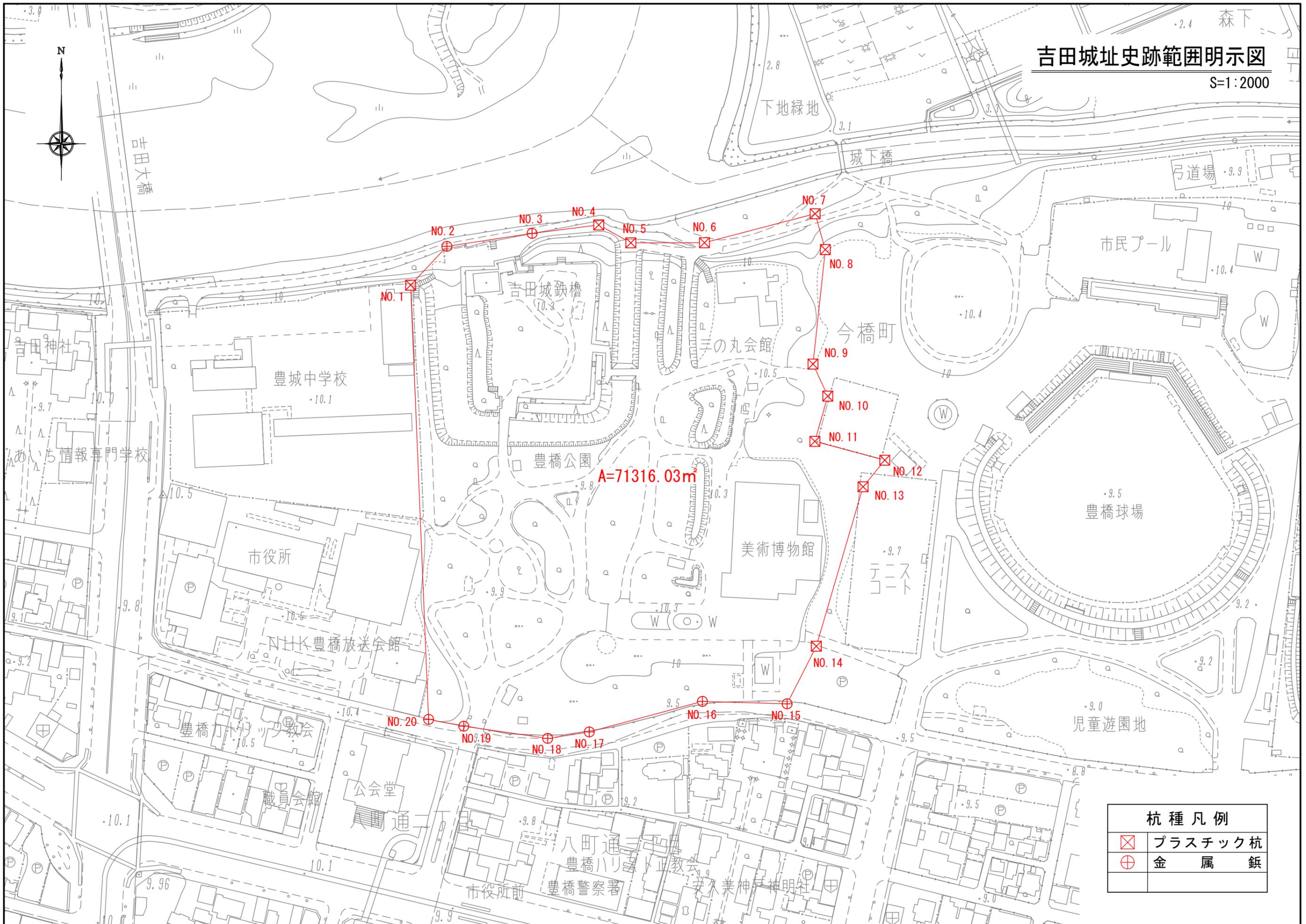
水門跡



総堀の土塁

吉田城址史跡範囲明示図

S=1:2000



A=71316.03m²

杭種凡例	
⊠	プラスチック杭
⊕	金属鉚

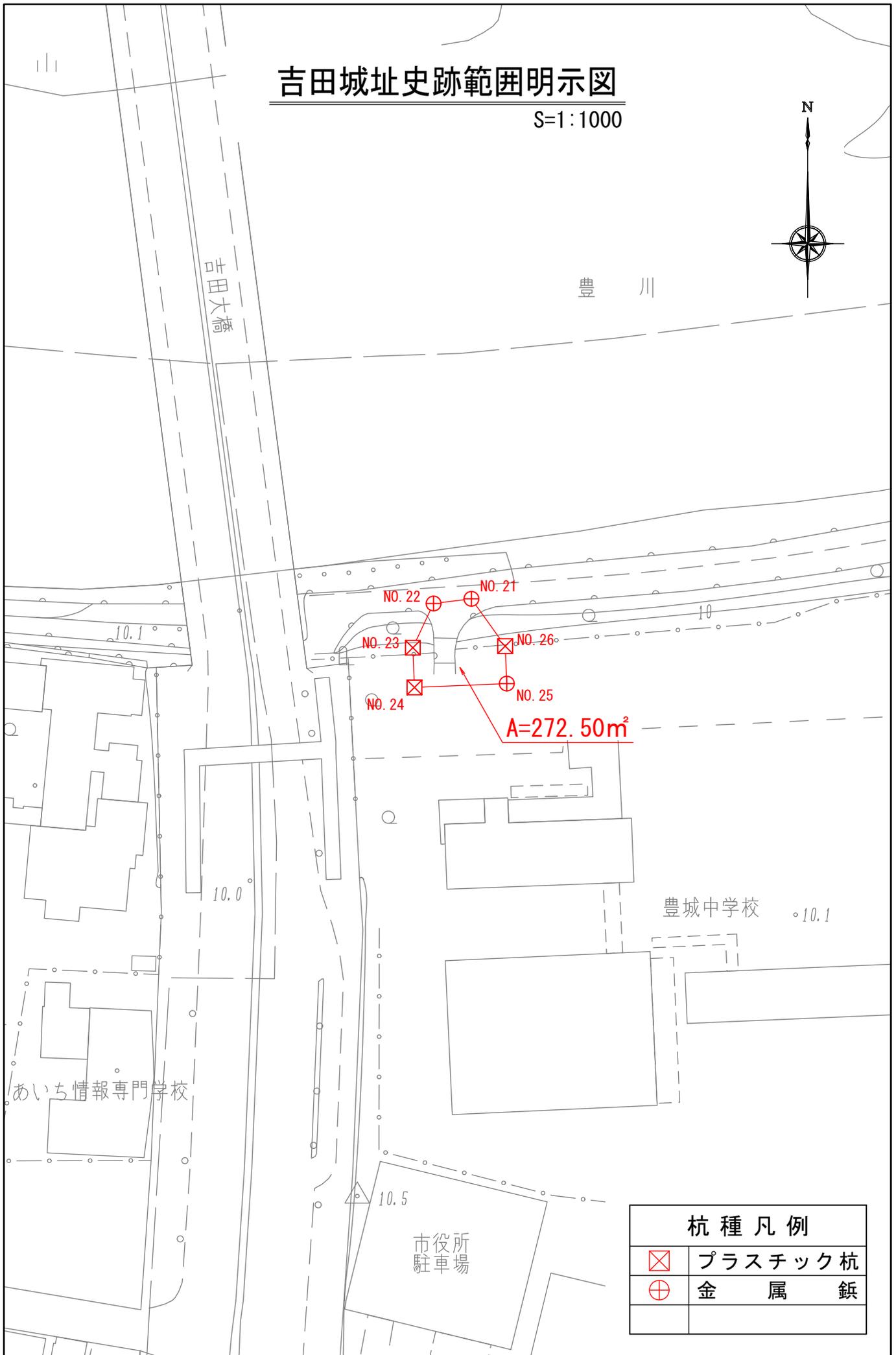
吉田城址史跡範囲明示図

S=1:1000



吉田大橋

豊川



豊城中学校 10.1

あいち情報専門学校

市役所
駐車場

杭種凡例

	プラスチック杭
	金属釘

上下水道局

吉田城址史跡範囲明示図

S=1:1000

2.9°

N

朝倉川

豊前橋

7.3

NO. 30

NO. 29

A=1782.39m²

豊橋刑務支所

NO. 28

9.6

飽海保育園

NO. 31

9.4

素盞鳴神社

NO. 27

NO. 32

土地改良会館

豊川用水総合事業部

杭種凡例

☒	プラスチック杭
⊕	金属鉚

